

道真の詩「早春侍」<sub>二</sub>宴仁壽殿」<sub>二</sub>同賦」<sub>レ</sub>認」<sub>レ</sub>春應」<sub>レ</sub>製。」<sub>二</sub>對」<sub>レ</sub>鏡」<sub>二</sub>の二詩をめぐって

—道真の『白氏文集』からの撰取態度の一考察（その六）—

焼山廣志

一

道真の詩に投影されている『白氏文集』の調査研究については、既に金子彦<sub>二</sub>郎氏の著作である『平安時代文學と白氏文集』をはじめとして数多くの研究者により論じられて来た。今回の拙稿もその視点に立っての論展開に他ならないが、その投影の度合、換言すれば道真が『白氏文集』をどのように利用し、自分のものとして血肉化して行ったのか、その過程は一概ではないはずである。その多様な撰取の様態の一つの手掛かりとなると思われる作品を二首「早春、侍」<sub>二</sub>宴仁壽殿」<sub>二</sub>同賦」<sub>レ</sub>認」<sub>レ</sub>春、應」<sub>レ</sub>製」「對」<sub>レ</sub>鏡」を取り挙げて更に一歩踏みこんだ考察を試みたいと思う。

二

まず、明らかに『白氏文集』からの撰取の上に詩作が行なわれている作品を挙げてみる。この白詩（以下『白氏文集』を白詩と略して記す）からの撰取の指摘は川口久雄氏よりなされている。（注一）

077\* 早春侍「宴仁壽殿」、同賦<sup>レ</sup>認<sup>レ</sup>春、應<sup>レ</sup>製。 自<sup>レ</sup>此以下百六首  
吏部侍郎之作

認得年芳第一科

認め得たり 年芳の第一科

先從禁禦遍經過

先ず禁禦より經過すること遍し

和風附外排山水

和風外に附きて 山水を排く

暖氣留中屬綺羅

暖氣中に留りて 綺羅に屬く

鳥語還嫌簧在舌

鳥の語りは 還りて 簧の舌に在るかと思ふ

華谷不放錦成窠

華の谷は 錦の窠に成すに放らず

今朝莫道春深淺

今朝 道ふこと莫かれ 春の深淺

偏愛吹噓長養多

偏に愛す 吹噓長養多きを

〔菅家文章〕卷二

\*注：作品番号は岩波古典文学大系本の通し番号に従った。訓みは筆者試読。

この詩の説明に川口久雄氏の次の一文がある。(注二)

この年の内宴は紀略に「廿日壬辰、内宴、奏<sup>二</sup>女樂<sup>一</sup>、文人賦<sup>レ</sup>詩。賜<sup>レ</sup>祿」とある。(中略)

貞觀十九年正月十五日、道真任<sup>二</sup>式部少輔<sup>一</sup>。(補任) 詩題は、文集の「認春戲呈馮少尹。李郎中・陳主簿」による。

ここで『白氏文集』の該当の詩を挙げる。

2607 \* 認春戲呈馮少尹。李郎中・陳主簿

認得春風先到處 認め得たり 春風の先づ到る處

西園南面水東頭 西園の南面 水の東頭

柳初變後條猶重 柳初めて變じて後 條猶重く

花未開前葉已稠 花未だ開かざる前 葉已に稠し

暗助醉歡尋綠葉 暗に醉歡を助けて 綠酒を尋ね

潜添睡興著紅樓 潜に睡興を添へて 紅樓に著く

知君未別陽和意 知んぬ君が未だ陽和の意を別たざるは

直待春深始擬遊 直に春の深くるを待って始めて遊ばんと擬す

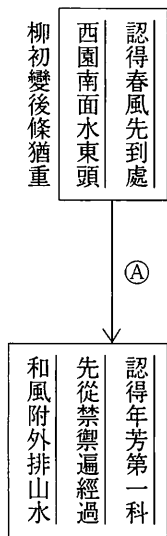
〔白氏文集〕卷五十五

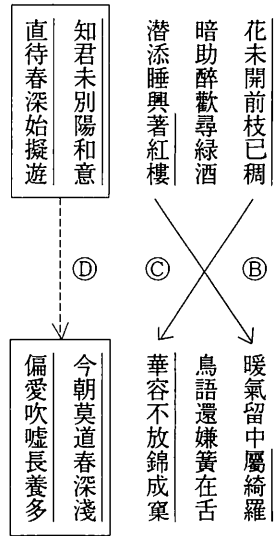
\*注：作品番号は花房英樹著『白氏文集の批判的研究』（2総合作品表）の分類番号による。本文は那波本『白氏文集』に従い、訓は『続国訳漢文大成 白楽天詩集三』に概ね従った。

両詩の類似箇所として指摘できる所を再度二詩を取り挙げて図式化したのが次のものである。

2607  
〈607 白詩〉

〈077 道真の朝〉





両詩の類似箇所としてまず指摘できる所は①で記した白詩の第一・二句「認得春風先到處、西園南面水東頭」と道真の詩、第一・二・三句「認得年芳第一科・先從禁禦遍經過、和風附外排山水」である。白詩の二句は「もう春がやって来た。春風がまず西園の南、川の東岸に吹き始めたのを知ったのだから」と解釈でき、道真の三句は「もう春がやって来た。春の先がけとなす花（梅）はまず宮中で咲きはこころび、その香は周辺に漂い始め、御殿の外にはのどかな春風が吹いて山水の景がひらけてきた」の意になると思う。

川口久雄氏はこの句を「春のさきがけをなす梅の花の咲いているのを、先ず禁園の中にもつけることができ、かこいにそうであまねく春の香気を尋ねてへめぐって見た」と解釈されている。(注三)

二句目の「先從禁禦」は明らかに白詩の表現「春風先到處、西園南面水東頭」を踏まえたものと考えられる。とすれば「禁禦」に見出せたものは「年芳（梅）」であって「遍經過」は「年芳」が主語になるのではあるまいか。つまり「年芳」の開花の発祥地を「禁禦」と見立てて、そこからその香が周辺に漂い始める、もしくは開花が周辺の地に及んで行くの意とみるべきだと考える。川口久雄氏のように「遍經過」を道真自身の行為とする解釈には従い難い。

この両詩の二句は「春風」と「年芳」という春を見出した対象物、また「西園南面水東頭」と「禁禦」のように、春の到来を見出した場所の相違はあっても発想は酷似している。また、同じように白詩の一・二句を要約する形で道真が「和風附外排水」の表現を一・二句の後に続けているのは白詩の内容を意識しての句作りには他ならないと思う。ここには明らかに白詩の投影を指摘することができる。

さらに、道真・白居易両詩の内容に目を移すと、道真がこの白詩によっていることを裏付ける新たな類似表現を指摘できるのである、先に図式化した⑧の箇所、道真の詩の六句目「華容不放錦成窠」の表現は「梅の花はまだ錦のます形の模様をあらわす（＝満開になる）」ところまでは至っていない」の意になるが、これは白詩の四句目「花未開前枝已稠」の表現を踏まえたものと見ることができ。また⑨の箇所、道真の詩の四句目「暖氣留中屬綺羅」の「綺羅に屬く」といったあてやかな、なまめかしい表現は白詩の六句目「潜添睡興著紅樓」の「紅樓に著く」の表現（「紅樓」の語は一義的には「朱ぬりのたかどの」の意だが、ここでは、「富家の女の住居、又、女子の居るところ」の二義的意味で解釈すべき所だと思ふ。）を踏まえた句作りと考えられる。さらに⑩の箇所、道真の第七・八句「今朝莫道春深淺、遍愛吹嘘長養多」と白詩の第七・八句「知君未別陽和意、直待春深始擬遊」に注目してみる。

白詩の句意は「君等はいっこうに新春を愛好しないようであるが、もつと（春が）深けてから遊ぼうとも思っているのか」と白居易が戯れに馮少尹、李郎中、陳主簿の三人に問いかけている箇所である。一方、道真の詩の意は「今朝は春がまだ浅いとか深いとか言うようなことは言わないで万物を多く育て養う春の氣をひたすら愛しようではないか」となる。この両詩句の類似は既に川口久雄氏の指摘されている所（注四）だが、白居易が戯れに三氏に「早春の景」のすばらしさを知らせようとして逆接的に問うた句意を道真は踏まえ「春の浅い、深いを論じることなく、今朝の早春の景をめどうではないか」と結んだと看做せる。表面的な語句の類似は「春深」以外、両詩の二句には明確にはできないが、両詩の句意を検討して行く中で、その発想の類似を新たに指摘することが可能になってくる。

以上、この二詩の場合、道真らが詩題そのものを白詩から撰っていることから、その影響関係は容易に想像されるが、更に綿密に分析してみると、道真がいかに白詩の詩内容を踏まえ、それを忠実に句作りに生かしているか、その一端がここで明らかに出来たように思う。

三

次に『菅家文草』巻四所載の「對鏡」を取り挙げてみる。

254\*  
對鏡

四十四年人 四十四年の人

生涯未老身 生涯未だ老いにたる身ならず

我心無所忌 我が心 忌むところなし

對鏡欲相親 鏡に對ひて相親まむとす

半面分明見 半面分明に見ゆ

雙眉斗頓頻 雙べる眉 斗頓に頻む

此愁何以故 此の愁へ 何を以ての故ぞ

照得白毛新 白毛 新なることを照すこと得ればなり

自疑鏡浮翳 自ら疑ふらくは 鏡翳を浮ぶるか

再三拭去塵

再三 塵を拭ひ去れば

塵消光更信

塵消えて 光更に信ぶ

知不失其眞

知んぬ 其の眞を失はざることを

未滅胸中火

胸の中なる火を滅たず

空銜口上銀

空しく口の上なる銀を銜む

意猶如少日

意なほし少き日の如くなれども

只已非昔春

只已に昔の春にあらず

正五位雖貴

正五位は貴しといへども

二千石雖珍

二千石は珍しといへども

悔來手開匣

悔來ゆらくは 手づから匣を開きたることを

無故損精神

故なくして精神を損ひにけり

\*注：作品番号・本文・訓みともに岩波古典文学大系本に従った。

この詩では道真が「鏡」という詠作素材を何に求めたのかが問題になるが、今回は白詩との関わりに限って考察してみ  
た。

この詩の内容を検討する前に、第十七、八句「正五位雖貴、二千石雖珍」の表現に注目してみる。

川口久雄氏は杜甫の寄裴施州詩の句を引きつつ補注で次のように論じられている。(注五)

入矢氏いう、この十七・十八句、ない方がよかった。

この詩は道真が異郷の地で譜岐守として日々を送る中で作られたものだけに、彼の鬱々とした心境が率直に表現されていると思われる。「四十四歳の年齢を迎え、ふと鏡を開いてみると愁えを含む男の顔が浮かんでいる。はじめはそれが鏡の曇りかと思ひ表面を拭いてみてもその曇りはとれない。それは白髪になりつつある自分の老いの身に他ならなかった。情熱だけは昔のままと自負しながら外形は正直に老いを重ねている。今日、鏡を見てつくづく思い知った。鏡をひらくという余計な事をした事が私を一段と落ちこませる結果となったことを。」との意だと考えられるが、確かにこの十七・十八句「正五位雖貴、二千石雖珍」の表現はこの内容から考えて、何故敢えてこの二句を入れたのかしっくりいかぬ感じを受けるのは否めない。

さて、ここでこの道具の詩と類似した詩題の白詩を検索すると次のような作品を挙げることができる。

〈白詩〉

\*0475  
感鏡

美人與我別

美人我と別る

留鏡在匣中

鏡を留めて匣中に在り

自從花顔去

花顔を去つてより

秋水無芙蓉

秋水に芙蓉無し

經年不開匣

年を経れども匣を開かず

紅埃覆青銅

紅埃青銅を覆ふ

今朝一拂拭

今朝いちたび拂拭し

自照顛頰容

自ら顛頰の容を照す

照罷重惆悵

照らし罷んで重ねて惆悵す



背有<sub>二</sub>雙盤龍<sub>一</sub>

背に雙盤龍有り

〔白氏文集〕卷一〇

〈白詩 ㊦〉

\* 1103 對鏡吟

閑看<sub>二</sub>明鏡<sub>一</sub>坐<sub>二</sub>清晨<sub>一</sub>

閑に明鏡を看着清晨に坐す

多病恣容半老身

多病の恣容 半老の身

誰論情性乖<sub>二</sub>時事<sub>一</sub>

誰か論ぜん 情性の時事に乖<sub>ま</sub>くを

自想形骸非<sub>二</sub>貴人<sub>一</sub>

自ら想ふ 形骸の貴人に非ざるを

三殿失<sub>レ</sub>恩宜<sub>二</sub>放棄<sub>一</sub>

三殿恩を失ふ 宜しく放棄せらるべし

九宮推<sub>レ</sub>命合<sub>二</sub>漂淪<sub>一</sub>

九宮命を推す 合に漂淪<sub>へうりん</sub>すべし

如今所<sub>レ</sub>得須<sub>レ</sub>甘<sub>レ</sub>分

如今得る所 須らく 分に甘んずべし

腰佩<sub>二</sub>銀龜<sub>一</sub>朱<sub>二</sub>兩輪<sub>一</sub>

腰に銀龜を佩びて 兩輪を朱にす

〔白氏文集〕卷十七

〈白詩 ㊦〉

\* 2241 對鏡吟

白頭老人照<sub>レ</sub>鏡時

白頭の老人 鏡に照す時

掩<sub>レ</sub>鏡沈吟吟<sub>二</sub>舊詩<sub>一</sub>

鏡を掩<sub>おほ</sub>ひて沈吟舊詩を吟ず

二十年前一莖白

二十年前一莖白く

如今雙作<sub>二</sub>滿頭絲<sub>一</sub>

如今雙じて滿頭の絲と作る

吟罷廻<sup>レ</sup>頭索<sup>二</sup>盃酒<sup>一</sup>

吟じ罷み頭を廻して 酒を索め

醉來屈<sup>レ</sup>指數<sup>二</sup>親知<sup>一</sup>

酔ひ来りて指を屈めて親知を數ふ

老<sup>二</sup>於<sup>レ</sup>我<sup>一</sup>者多窮賤

我より老いたる者多く窮賤

設使身存寒且飢

設使身存すとも寒え且つ飢う

少<sup>二</sup>於<sup>レ</sup>我<sup>一</sup>者半為<sup>レ</sup>土

我より少き者 半は土と為る

墓樹已<sup>レ</sup>抽<sup>二</sup>三五枝<sup>一</sup>

墓樹已に三五枝を抽んづ

我今幸得<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>頭白<sup>一</sup>

我今幸に頭の白きを見るを得

祿俸不<sup>レ</sup>薄官不<sup>レ</sup>卑

祿俸 薄からず 官卑からず

眼前有<sup>レ</sup>酒心無<sup>レ</sup>苦

眼前酒有りて心に苦無し

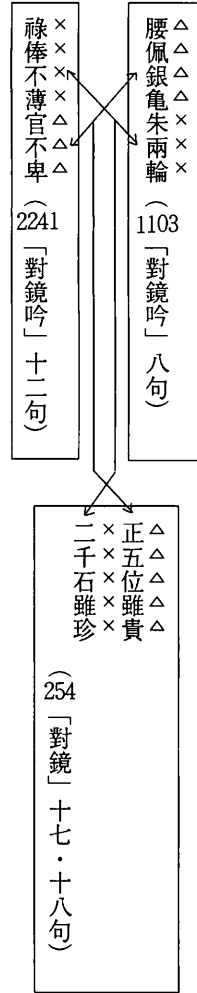
祇合<sup>二</sup>歡娛<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>悲

祇合に歡娛すべし 合に悲しむべからず

〔『白氏文集』卷五十二〕

\*注：以上三首とも作品番号は、花房英樹著『白氏文集の批判的研究』（2 総合作品表）の分類番号による。本文は那波本『白氏文集』に従い、訓は『統国訳漢文大成 白楽天詩集』に従った。

以上の白詩三首のうち ①103 對鏡吟 ②2241 對鏡吟 の次の表現にまず注目してみる。



(図式している箇所は詩中、×印、△印は、両詩の類似箇所を示す)

まず白詩の「1103 對鏡吟」の第八句「腰佩銀龜朱兩輪」の句意は「忠州刺史となつて腰には銀魚袋を佩び、朱塗りの車に乗られる身分である」とあるが、その詩句中「銀龜」の語は、鶴田久作氏の注(注六)によると「銀魚袋なり。官吏の腰に佩ぶるもの」とされる。この「銀魚」とは銀で飾つた魚袋の事で、唐代では五品官以上の佩したものとある。また同詩句中の「朱輪」とは『後漢書』の中の一文「中二千石二千石皆巨蓋、朱兩轡、其千石六百石朱左轡」(傍線、筆者)を踏まえた語と言われ、貴人の乗る車を指す。この二語の投影として道真の詩句に目を移すと「腰佩銀龜」は道真の詩の「正五位」にそれを指摘することが可能であるし「朱兩輪」は道真の詩の「二千石」に指摘できるのではないだろうか。一方白詩の「2241 對鏡吟」の第十二句「祿俸不薄、官不卑」の「祿俸不薄」は道真の詩中の「二千石雖珍」に、また「官不卑」は道真の詩句中の「正五位雖貴」に投影を指摘することが可能のように思う。

以上の事例から考えられるのは前述したように道真の詩の十七、十八句「正五位雖貴、二千石雖珍」の二句の存在がこの「對鏡」の詩の流れの中で一見不自然さを与えているという感じを抱かせるものが白詩からの投影という観点から考えると、その投影のもとで道真が句作りをした詩句という推測がなりたつのではないかという点である。換言すれば白詩と

の関わりでの考察を進めて行く上で、この道真の詩の真意がより鮮明に見えてくるのではないかという点である。

そこで更に詩の内容について白詩及び道真の詩を吟味してみる。

前掲の白詩三首のうち、「<sup>0475</sup>感鏡」のみが他の二首と詩情を異にする。具体的には「<sup>0475</sup>感鏡」の詩意は「美人と別れるとき記念に置いていった鏡で、今日自分の老いた姿をうつしてみると悲しみが一段と深まった。見れば仲良くからみ合つてわだかまる二匹の竜が背に彫刻されているのだから」となると思うが、ここでは「鏡」によって年月の推移を意識し、その悲哀を述べるといった類型はとっているものの、その鏡に、別れた女性の残影が癒着しているため、詩情は女性との別離の悲しみに比重がかかっているようである。

それに比して「<sup>1103</sup>對鏡吟」「<sup>2241</sup>對鏡吟」二首は「鏡」によって触発された月日の推移の悲哀を扱った顕著な例と言えよう。具体的には「<sup>1103</sup>對鏡吟」では、自分の今の境遇を自嘲的に「自想形骸非貴人」「九宮推命合漂淪」と述べ、その自分を「如今所得須甘分、腰佩銀龜朱兩輪」として慰めている。また「<sup>2241</sup>對鏡吟」では鏡により自分の老いを自覚しつつも「老於我者多窮賤、設使身存兼且飢」「少於我者半為土、墓樹已抽三五枝」と困りの人間と比して、更には「祿俸不薄官不卑」と述べ、今の自分の状況を寧ろ積極的に評価する方向で受け止め、その故に「只合歎娛不合悲」と結んでいるのである。

つまりこの二詩には「鏡」にうつった自分の老いを愁いとして受けとめつつも、そのことでくよくよしても始まらぬという別方向へ視野の展開がはかられているのである。

ここで道真の詩との比較に移ると、語句の類似では前述の十七、十八句以外に次の表のような指摘ができる。

『白氏文集』	『菅家文章』
白頭老人照鏡時 (2241「對鏡吟」第一句)	四十四年人 生 <sup>254</sup> 未老人 (254「對鏡」一・二句)
今朝一拂拭 (0475「感鏡」七句)	再三拭去塵 (254「對鏡」十句)
白照顧頓容 (0475「感鏡」八句)	照得白毛新 (254「對鏡」八句)
經年不開匣 (045「感鏡」五句)	梅來手開匣 (254「對鏡」十九句)

概ね語句は白詩「感鏡」より撰取されているようである。しかし道真の詩情に関わりのある白詩は前掲の「<sup>2241</sup>對鏡吟」<sup>1103</sup>「對鏡吟」の二首であると思われる。

再度ここで道具の詩の十七、十八句「正五位雖貴」「二千石雖珍」に戻ってみる。この二句に表現の原拠となったものを白詩に求めることができることは前述の通りである。ただこの二句中の「雖」の使い方に注目してみる必要がある。「雖」の意はこの句中では「確定の助字（…けれども）」としての使われ方である。白詩においては前述の「<sup>1103</sup>對鏡吟」では七句で「如今所得須甘分」と自分の今の境遇を全面的に容認する姿勢（これが、白居易のポーズであっても道真にはない、心の余裕といったものが漂っている）を打ち出しているし、同じく「<sup>2241</sup>對鏡吟」の十三、四句で「眼前有酒心無苦、祇合歡娛不合悲」のように今の境遇を肯定できるだけの余裕が感じられるのに比して道真のこの二句は何か心の中にある、あ

る思いを全て吐き出すことができず、悶々としている心情が白詩に対比することにより、より明確になってくるように思えてならない。その心情を探る一つの手掛かりとしてこの「雖」の働きに注目してみたいのである。

この心情は道具のこの二句の前後に注目するとはよりはつきりしてくる。十五、十六句の「意猶如少日、只已非昔春」のこの二句には道真の敢えて自分を平静に見せようとする気負いのようなものが漂っている。特に「意猶如少日」にはそう言わざるを得ない切迫した道真の心情が含まれている気がしてならない。そして十九、二十句で「悔來手開匣、無故損精神」と自分のやっている行動を徒勞と見る一つの転化がなされている。

そうした道真の心情を白詩からの投影という観点から分析してみると、白詩の表現に倣いながらその詩の内容そのものには全面的に肯首できない道真の心情が浮きぼりになってくるように思う。そこに道真のこの詩にこめられた真意が隠されているのはあるまいか。更に考察を進めると前掲の白詩「1103對鏡吟」の三句から六句目の句意である「吾が性質が時流にあわなないことは今更言うまでもないが、一体吾が人相が貴人にはなれない相である。殿中に仕えて君恩を失ったからには放棄せられるのは当然で、九星から吾が運命を推定しても淪落すべきはずである」(注七)を受けて「だから今日の境遇に対しては決して不足を言うべきではない。忠州刺史となって腰には銀魚袋を佩び、朱塗りの車に乗られるのであるから」と結ぶ詩情に、讃岐守として二年を過ごしている道真にとっては、とうてい相入れることのできないものがあつたように思う。ここではその讃岐時代の巻三、巻四の作品の全般的な傾向について論じることが出来るほどの分析・考察はなしえていないが、例えば次のような詩の存在はその一つの手掛かりになるのではないかと思う。

194\* 始見二毛

我老於潘一十年 我れ 潘より老いぬること一十年

二毛何處甚留連 二毛 何れの處には 甚に留連したる

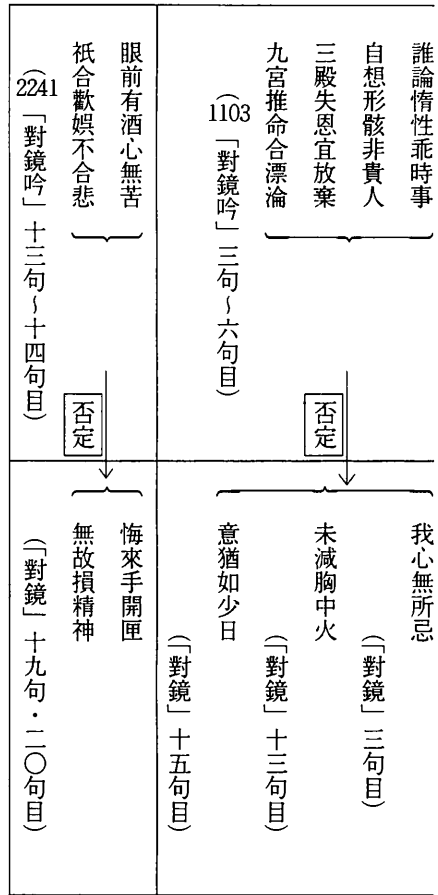
當初不見今初見 當當 見ざりしに 今初めて見る  
 為是愁多臥海孺 是れ 愁へ多くして 海孺に臥するがためになり

〔菅家文章〕卷三

\*注：作品番号・本文・訓みともに岩波古典文学大系本に従った。

この詩は、川口久雄氏の考証によれば仁和二年、道真四十二歳の時の作である。此の年三月二十六日に讃岐守として着任している。それから半年後の秋に作られたものと考えられる。詩題の典故となったのは川口久雄氏の指摘のごとく『文選』の潘安仁の「秋興賦」の序の冒頭の一文「晋の十有四年余春秋三十有二、始めて二毛を見る」（注八）とあるに拠ったものである。この道真の句意は「私は潘安仁より年をとること十年、今年四十二になる。私の白髪はその十年間、どこに留っていたのだろうか。三十二歳の時は白髪一つなかったのに、今になって白髪があらわれたのはきつと悩みが多く、悶々とした気持ちで讃岐の海辺近くに日々を送っているからであろう」となると思うが、この詩に込められているものは白髪にしてしまった心労の根源が讃岐生活を余儀なくされている今の状況にあるという把握の仕方である。この心情を更に増幅させたのが今回取り挙げた「對鏡」の詩中に流れているものではないかと推測してみる。この推測がなり立つと仮定するならば、更に次のような指摘が可能になってくる。

<p>『白氏文集』</p>	<p>『菅家文章』</p>
<p>多病恣容半老身          (1103) 「對鏡吟」二句目</p>	<p>四十四年人          生涯未老身</p>
<p>否定</p>	<p>〔對鏡〕一・二句</p>



道真の右の表で抜き出した詩句が白詩の詩句内容の「否定」という形態での投影箇所と考えると道真の句そのものの重みが一層ますますように思える。とすれば、前述の道真の詩句十七句、十八句で「正五位雖貴」「二千石雖珍」の「雖」を使った意図が明らかになってくるのではあるまいか。つまり、国守の地位にある自分を容認しつつも、それに安住できない、換言すれば自分の意に反した所で命じられた今の状況、境遇に納得できぬ心境が「雖」に込められているのではないかと考える。それ故、白詩にあるように、その愁いを酒で粉らわすことはできず、十九句、二〇句で「悔來手開匣、無故損精神」とあくまでも「理性」で、そのやりきれない心境を転化させようとする道真独自の心境が一層鮮明に浮かびあがってくるのである。



以上、「類似詩題の白詩との関わりが内容においても深く窺えるもの」として「早春、侍<sub>二</sub>宴仁壽殿<sub>一</sub>同賦<sub>レ</sub>認<sub>レ</sub>春、應<sub>レ</sub>製<sub>一</sub>」  
 「對<sub>レ</sub>鏡」の二首を白詩との比較を通して考察して来た。以上の過程の中で、道真が白詩の同詩題中の作品から自分の詩作に語句・诗情・発想を学ぼうとした姿勢が実証できたように思う。これは一種の類書的白詩の利用ともみなせるが、その白詩の理解は非常に正確で、しかもその理解の上に道真の独自の見解が付加されていることも、ある程度判明した。つまり、今回取り挙げた作品は、同詩題の白詩を綿密に分析・考察していく過程で道真の詩内容の隠されたものが浮かび上がってくるような句作りがなされているものの一例として試論を提起したしだいである。出典の考察を白詩だけに絞る、それも限られたものの中で無理に関連付けようとした限界を認めざるを得ないが、それでも、道真の白詩の享受の姿勢の一端をうかがえることはできたように思う。

(注一) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注

六五四頁 七七「一」

(注五) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』

三〇四頁 二五四頭注「一二」及び六八七頁

(注二) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』

六五四頁 七七補注「一」

二五四補注「二」

(注三) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』

一六七頁 七七頭注「三」

(注七) 『統国訳漢文大成 白楽天詩集二』 七五五頁

七五六頁

(注四) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』

六五四頁 七七補注「四」

(注八) 秋興賦一首并序(秋興の賦一首びに序) 潘安仁

晉十有四年、余春秋三十有二、始見一毛。

以<sub>レ</sub>太尉掾<sub>一</sub>、兼<sub>二</sub>虎賁中郎將<sub>一</sub>、寓<sub>二</sub>直于散騎之  
省<sub>一</sub>。高閣連<sub>レ</sub>雲、陽景空<sub>レ</sub>曜。珥<sub>二</sub>蟬冕<sub>一</sub>而襲<sub>二</sub>紈  
綺<sub>一</sub>之士、此焉游處。僕野人也。偃息不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>茅  
屋茂林之下<sub>一</sub>、談話不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>農夫田父之客<sub>一</sub>。攝<sub>レ</sub>  
官承<sub>レ</sub>乏、猥廁<sub>二</sub>朝列<sub>一</sub>。夙興晏寢、匪<sub>レ</sub>逞<sub>二</sub>底寧<sub>一</sub>。  
譬猶<sub>二</sub>池魚籠鳥<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>江湖山藪之思<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是染<sub>レ</sub>  
翰操<sub>レ</sub>紙、慨自而賦。于<sub>レ</sub>時秋也。故以<sub>二</sub>秋興<sub>一</sub>  
命<sub>レ</sub>篇。其辭曰、(序のみ引用。傍線筆者)

『全釈漢文大系 文選(文章編) 二一六六頁よ  
り抜萃

(やきやま・ひろし 大学院第七回修了)

有明高専)